

兵庫県の豊岡市で開催された歴史地震研究会という学会(2025年9月27日～29日に開催)に参加しました。歴史地震研究会ではたくさんの研究者の方が過去に起こった地震について様々なことを発表していました。例えば、1651年ペルーで発生した地震について、この地震によって発生した津波が日本に到達したという記録がありますが、実はその津波は根拠が少なく別の日付の大地震と間違えている可能性も十分に考えられるという発表がありました。この発表を聞き僕は今まで当たり前だと思っていたことに対して別の意見を出すのは勇気がいるため敬服しました。また、1925年に発生した北但馬地震の救済融資に関する発表も印象に残りました。この発表では、1923年に発生した関東大震災の被害規模と北但馬地震の被害規模を比較していました。更に、北但馬地震で被害を受けた城崎町の復興のためにはその街の基幹産業である旅館業を復旧することが必要だという考えから、起債された旅館復旧資金など地域産業に根差した復旧方針という考え方が後の地震災害復旧でも引き継がれていました。これを拝聴して僕は、災害に関する支援はその土地の人たちのことを考えて進めることが大切だとわかりました。

学会では、理科研究部の部員も発表をさせて頂きました。高校生の徳田先輩は、口頭発表で「埼玉県所沢市に残る日記から読み取る1898年～1924年に発生した被害地震と日記の資料価値の探求」という発表をしました。徳田先輩の発表は自信に満ちて落ち着いてプレゼンをされていました。発表後の質疑応答では複数の質問が寄せられ、自信をもって答えている姿に憧れました。北原先輩はポスター発表をしていて「千葉県印西市に残る1923年関東地震に関する記録」という発表でした。北原先輩のポスターもとても見やすくまとまっていました。先輩のポスターにも多くの研究者の方々が集まっていて先輩と質問をし合ったりしていました。知見を交換しているとき、先輩は熱心にメモをとっていて先輩の向上心には尊敬の念を覚えました。

公開講演会では、一般社団法人マチノイト代表の方や佛教大学名誉教授の方、豊岡市危機管理部課長の方から、豊岡市の復興や防災にまつわる貴重なお話を聞けました。例えば北但馬地震が起こったあとの復興建築について、豊岡市は防火防振のコンクリートを使った建築を立てる場合補助金を出し、建築にかかるお金を木造の建築でかかるお金と同じくらいにしたそうです。しかもこのようなコンクリートの防火建築は、3年ほどまえにあった火災の際無事だったそうです。また木造の建造物も防火のものになっておりドアを残してコンクリートで覆われていたり、建物の側面に銅板が使われていたりするそうです。

懇親会では大学生の人が何人かいてその人達と仲良くなり、次の日のポスター発表ではその人達のところへ行って話を聞いたりしました。大阪から来た人や宮城から来た人もいました。ほとんどの人が大学生で僕も大学生だと思われましたが、自分は中学生ですと言ったらとても驚かれました。その人達は次の日のポスター発表で僕にポスターの内容をとてもわかりやすく教えてくれたり、質問にも答えてくれました。例えば藤本先生の「先島諸島における津波と伝承の関連性」という研究では先島諸島のような島の伝承に津波に関連するものがあるのかというもので、どの地域に津波の伝承があり、どの地域に人魚についてのもののような津波とはまた別の伝承があるのかということがとても見やすくまとまっていて脱帽すると共に自分もこんな風に素晴らしい研究者になりたいという憧れを抱きました。

最終日の巡検では実際に100年前にあった地震の復興建築を見て回りました。前日の口頭発表や公開講演で紹介されていた豊岡市の旧市役所や城崎市の温泉街などを見に行きました。実際に見ることで更に理解が深まりました。豊岡市の復興建築にはアーケード街もあり、たくさんの建築がきれいな形のまま残っていました。そしてそれらの復興建築群は兵庫県の景観遺産に指定されているそうです。案内して下さったマチノイトの方が、今もその建築たちは昔とは違うけれど、カフェやカバン屋などきちんと使われていると聞いて、復興建築は震災から人々が立ち直った記録だからまだまだ残ってほしいと思いました。